

高校生のコラージュ作品の形式分析と内容分析

青木 いづみ*・金丸 隆太**

(2008年6月30日受理)

Form Analysis and Content Analysis of High School Student's Collage Work

Izumi AOKI and Ryuta KANEMARU

キーワード: 高校生, コラージュ, 青年期

本研究は、高校生年代のコラージュ作品の特徴を形式分析と内容分析の点から検討し、生徒を理解するための一つ的手段としてコラージュを活用した際に、指標となるものを示すことを目的とした。コラージュを制作した高校1年生(377名)の作品を分析した結果、青年期である高校生年代のコラージュ作品には、さまざまな表現特徴がみられ、性差によつての違いも表れた。

はじめに

青少年の凶悪犯罪が社会問題となるなか、児童生徒の問題行動は多様化し学校に責任の所在を求められる問題が数多く発生している。児童生徒の問題行動の多様化は、複雑な要因が絡み合つて起きると考えられ、生徒本人にも周囲にいる保護者や教師にも理由がわからないことが多い。自分の気持ちを言葉によつて表現することが不得意な児童生徒が増える中、教育相談において言葉以外のサインを積極的にとらえる必要性を感じている。

有元(2004)の調査によると、中学・高校生の半数以上の生徒が学校が楽しくなく、「学校で腹がたつたりいらいらすること」があつた児童・生徒の割合が小学生で60%以上、高校生になると76%と大部分の生徒がいらいらしている状態である。しかし、それを発散せずに「学校では良い子のふりをしている」と答えたのは、高校生では約3分の1の生徒である。つまり、その3分の1の生徒が学校ではいらいらしているにもかかわらず、良い子の仮面をかぶつて生活をしているということになる。特に注目したいのは、「自分のことをわかってくれる先生がいる」に対して高校生では70%の生徒が「いない」と答えている。かなりの多くの生徒が教師との相互交流がうまくいっていないといえる。有元が報告するように、自分の意思や感情を言葉で表現できず、本当の気持ちを伝えられず、周りに合わせている児童・生徒、そして、それを理解

*茨城県立大洗高等学校 **茨城大学大学院教育学研究科

するためのコミュニケーションが周りの大人とうまくいっていないということが学校現場では起きている。児童生徒の個性や個別的ニーズを的確に把握するためには、多方面からかつ統合的に理解することが望まれる。

非言語的コミュニケーションの一手段として、パーソナリティの言語化されにくい側面を理解する際に有用な方法に描画がある。寺嶋(2000)は「生徒の心の理解を必要とされる学校現場では、彼らの言語的な表現能力が発達途上にあることや、実施の容易さ、絵を描くことへの親しみやすさなどの観点からみても描画は特に適した方法」と述べている。描画を取り入れることは、言葉でのやりとりが苦手な生徒にとっては、関係づくりのきっかけになったりする。また、「絵を描く」という行為は、小さい頃から誰もが経験していることであり、特別な心理検査より比較的抵抗が少なく、実施の容易さという点では児童生徒が集団で生活している学校には適した方法である。その他日高(2000)では、「描画には心の葛藤が表れている場合もあり、描画テストは問題行動の予防という観点からも有効である。また、言語化できない子どもの内面を視覚的に把握することができることから、問題行動を示している子どもの心理状態を保護者や教師に説明する際の客観的な資料となる」と述べている。しかし、絵の苦手な生徒の場合、集団の中で「絵を描く」ということに大きな抵抗がある。そこで今回はコラージュ(森谷, 1988 など)という表現手法に着目した。

加藤(2006)は「学級においてコラージュの持つカタルシス効果と教師が生徒一人一人を理解するための手がかりとしての二つの効果が期待できる」と述べている。さらに学校では美術の技法として授業にも取り入れられている。教育、心理療法だけでなくソーシャルスキルの発達、社会性の向上などを目的とした自己開発などの分野でも注目を浴びている(青木, 2000)。

高校生年代は、Bühler, C.(1969)が言う思春期から青春期へ移行期であり、若い人々にとっておもしろくない時期である。この時期の特徴を Böhler, C.は「ふきげん、落ち着きのなさ、不安、肉体、精神的不快、これは反抗と粗暴、気まぐれ、だらけた態度に現れることがある」と述べている。その不安定な状態が特徴となるこの年代の内的世界がどうコラージュに表現されるのか。描画法においては、一谷・横山(1979)は、バウムテストを用いて生徒の不応行動の徴候がどのような形で表れているか研究し、特徴的な行動パターンの類型と樹木画描出パターンの特徴との関係を概略的、一般的に示唆した。そして、1987年に森谷が学会発表をして以来、我が国で急速にコラージュ療法は広まっていった。教育現場においては、教員の教育相談研修などでコラージュを用いていることが多いが、学校におけるコラージュの研究は十分に行われていないのが現状である。藤井(2002)は、中学生のコラージュにみられる思春期の発達の特徴として、第二性徴や自己像の葛藤、視線恐怖傾向をあげている。この年代のコラージュ作品の特徴に関する基礎的な研究は他に、杉浦(1994)や滝口・山根・岩岡(1999)、加藤(2003)などがあるが、統計的データはまだ充分ではない。

そこで本研究においては、コラージュ作品を形式や内容を分析することにより、高校生年代のコラージュ作品の特徴を明らかにし、高校生にコラージュを活用した場合、その作品の特徴から生徒を理解するための一つの手段になればと考え、本研究を行った。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、県内公立高等学校4校の1年生13クラス391名であった。このうち、コラージュ未実施

をのぞき、さらに切片数が過剰に多く極端な作品として個別に分析する必要があると判断された 2 名をのぞき、375 名を分析対象者とした。分析対象者の属性は、男子 191 名、女子 184 名であった。

2. 調査時期と準備物

2007 年 2 月下旬から 3 月に実施した。白色八つ切り画用紙、はさみ、のり、雑誌、振り返り用紙を用意した。用具はすべて人数分用意した。雑誌については、1 クラス 300 冊前後準備した。

4. コラージュ制作

コラージュ制作は、クラス担任教諭と調査者が一緒にクラスに入り配布から回収まで、50 分間で実施した。ただし、A 高等学校に関しては、同時に 6 クラスで実施したため、調査者は各クラス巡回するように歩き、クラス担任教諭が実施した。各学校とも教示に関しては、事前に各クラス担任教諭に指導の手引きを配布し、説明を 1 時間程度行った。実施方法は、マガジン・ピクチャー・コラージュ法で行った。切り抜き用の雑誌は、ファッション雑誌、カタログなどである。本研究は、学校での実施を念頭においているので、集めやすいものを、中心に学校の図書館に置いてあるような雑誌などを準備した。

5. コラージュ分析方法

コラージュは、杉浦(1994)、今村(2001)、加藤(2003)を参考とし、独自の視点を加え、形式分析と内容分析を行った。

結果と考察

1. コラージュ作品の形式分析

結果の処理方法は、ローデーターを Microsoft Excel 2007 for Windows に入力し基礎データを作成した。統計解析には、エクセル統計及び SPSS Student Version 13.0J を用い各項目ごとに検定をおこなった。前述の通り、ここで切片数の非常に多い作品 2 枚を分析から除外した。この 2 作品については別に考察した。

(1) 切片数

切片数に関して男子と女子では有意な差が認められ($t(329.4)=5.53, p<.001$)、男子(平均 10.2 枚)に比べ女子(平均 14.7 枚)の方が使用された切片数が多かった。全体の平均値は、12.4 枚であった。杉浦(1994)の研究では 15.6 枚、加藤(2006)の研究では 30.1 枚とかなり高い数値になっている。本研究の場合、制作時間が 40 分と他の研究に比べ時間が短時間だったことの影響が大きいと思われる。実施した生徒たちは、どのクラスも回収の時間になってもまだまだ時間があるならやっていたい雰囲気が感じられ、「もっと時間がほしい」「時間が足りなかった」という感想が多かった。制作時間を長くすれば切片数の平均値もあがるのではないだろうか。八つ切りの画用紙であっても高校生がコラージュによって十分な自己表現をするのに必要な時間は、40 分以上である可能性がある。一方で学校現場でコラージュを作る際の現実的な時間制限を考えると、適切な時間をどのぐらいに設定するかは難しい。個別のカウンセリング場面を設定できる場合は、一回で完成させることにこだわらず、次回続きを作れることを提案することも大事だ

ろう。

また有意な性差が認められ、女子の方が男子より多く貼られていた。杉浦(1994)や滝口(1999)らの基礎的研究でも高校生群は、女子の方が有意に多い。ここで特殊な例と見なして今回の研究から除外した、切片が過剰に多い作品 2 例のうち、1 例を図 1 に示す。この作品は 389 枚の切片から作られているが、明らかに「ちぎり絵」の形態をとっている。こういった表現も可能なのがコラージュの大変興味深いところであり、表現療法としての豊かな可能性を表していると言える。



図 1. 切片数最高の作品(女子)

また、高校生のロールシャッハテスト反応について述べてみ

たい。梶塚(1985)の研究では、男子生徒は、正常成人と比較して反応数が少なく、多くの反応決定因において低い値を示したが、女子生徒の方は、プロトコルは正常成人に近く、反応数も多く、いくつかの決定因において高い得点を示し、変化に富んでいるという結果だった。つまり、女子生徒は男子生徒より抑制的傾向が認められず、より活気がみちているという考えを示し、これは、反応の際に女子生徒は感情をこめた言い回しをするためでもあると述べている。

「この感情をこめた言い回し」という点でコラージュ制作でも、実際、様子を見てみると、女子の方は、雑誌をパラパラと見ている時間は長いが見ている間に「選ぶ」と「切る」という作業も行っており、自分が「いいなあ」と感じた切り抜きをどんどん切っていた。やはり、杉浦(1994)が述べるように、高校生の女子は男子に比べ、コラージュアクティビティによって感情や気分が引き出されやすいのだろうと思われる。

(2)重ね貼り

全体で 69.3%もの作品に重ね貼りがみられた。重ね貼り数みると、男子の方は、重ね貼りを行っているが、枚数としては少なく、女子の方が多くの枚数を重ねている人が多かった。重ね貼りという行為に対しては、有意な差はみられないが、枚数でみると男女で有意な差は($t(283.9)=4.42, p<.001$)認められ、女子の方(平均 6.5 枚)が多かった。重ね貼りという行為は、コラージュの安全性の 1 つでもある。中井(1993)が「上に別の切片を貼る」という回避法があり、これがあるから安全性が高いとしている。筆者の経験からは、見せたくないものを隠す場合、うすっぺらでいやだと感じる場合などに重ね貼りが見られるようにに思える。杉浦(1992)らは、「貼ってみたけれど、心が落ち着かない」場合などにするとしており、上別府(1999)は、細かく見て「貼ってしまった物が自分の気持ちにそぐわないので、もっとぴったりくるものに修正しよう」という場合や「気になるので貼ったけれども、その物に対して否定的あるいは両面的感情がある」場合、「思わず本当の自分や自分の感情を現す物を貼ってしまったけれど、やはり隠しておきたい、または見せたいけれども全部はみせたくない」場合などがあるとしている。つまり、女子の方が男子に比べ、見せる自分と見せたくない自分を表現する力が高いということなのだろうか。

ここで、特殊な重ね貼りを行っている作品あげてみる。図 2-1 に挙げた作品(男子)は、下にたくさん切り抜きが貼ってあるが、写真にある大きな魚の切り抜きが左側だけ糊付けされているので、めくることができ、それをめくると下の切り抜きを見ることができる(図 2-2)。このような特殊な貼り方をしている作品は、この 1 枚だけであった。この男子生徒は感想に、「とても楽しく、自分だけの作品をつくることができ、とても満足した。また、友達と比較することもコラージュ作りの長所だと思った。」と書いている。本人はとても作り

終わって満足なのだろう。「一枚めくる…」とそこにある驚きやおどかしが自分の周りへのアピールなのだろう。佐藤(2003)は、扉の向こうに隠された真実を開示していく段階で、茶化してごまかすことで本音を和らげたり、披露しながら隠したりする面と、茶化しやごまかしの中に真実を強く訴えている面があると指摘する。この作品はまさにそのような感じがする。見せたいけど見せたくない微妙な気持ち、めくると人の顔ばかりの中に真正面を見ている魚、揺れ動く青年期の気持ちを表現しているコラージュ作品なのではないだろうか。



図 2-1. 特殊な重ね貼り(男子)



図 2-2. 切り抜きをめぐったところ

(3)貼付部(右・左)

右部貼付の割合には、有意な差が認められ($t(358.8)=2.21, p<.05$), 女子(平均 45.5%)の方が男子(平均 41.8%)より右部に貼り付ける割合が高かった。しかし、左部貼付の割合に有意な差は認められなかった。佐野(2003)は、コラージュ作品についてのみだが、描画アセスメントにおける従来の「右領域は外向性を象徴する」という解釈の「外向性」という枠組みの中に、「積極的な変化への努力」という意味を含める可能性を示唆している。ここから、右部貼付が女子の方が多いいことは、女子の方が「変わりたい。」「新しい何かを求める。」という強い気持ちの表れなのだろうと考える。

(4)余白

余白の有無も分量も、有意な性差は認められなかった。杉浦(1994)の研究でも同様に有意な性差は認められていない。今回のコラージュ作品の中で全く余白がない作品は7点あり、そのうち男子6点、女子1点であった。図3、図4を見るとわかるように、全く余白がないと圧迫感を感じるが、切り抜きに白が多い作品はあまり圧迫感を感じない。図3は余白が全くなかった女子でただ1人の作品である。後ろの雪山の白さがあまり圧迫感を感じさせない。感想で「直感で選んで切って貼ったので、最初ほうまくいくかどうか不安だった。けれど、最終的には自分で満足できたのですごく楽しかった」と述べている。とても満足感を感じるし、心的エネルギーの高さを感じた作品である。この女子生徒にとっては、台紙の大きさが小さ過ぎたのかもしれない。図4は、男子の作品である。圧迫感を感じさせる反面寂しさも感じる作品である。感想では、「悩んだ。時間が少ない。」とあるが、コラージュを楽しんで作っていたようだ。

逆に余白がありすぎると、寂しい空虚感を感じる。図5と図6は、それぞれは男子・女子の中で最も余白の分量が多かった作品である。図5、図6とも制作した生徒は、コラージュ制作を楽しむことも、自分で満足のいく作品も作れておらず、制作後の気持ちは「よくわからない…」「つまらなかった。」とあった。心的エネルギーの低さを感じさせる作品である。



図3. 余白がまったくない作品(女子)



図4. 余白がまったくない作品(男子)

(5)はみ出し

はみ出しについて、有意な性差は認められず、男女ともにはみ出しがあった作品は 16%だった。杉浦(1994)では、はみ出しは運動系の発達と、意識的・無意識的に枠からあふれさせるアクティビティの二つと関連すると述べている。幼児・小学生の作品でのみ出しは、手先の器用さ、つまり発達の差に関係するだろうが、高校生ぐらいになると、元気さ故のはみ出しつまり持っているエネルギーをそのまま表現するこ



図5. 余白が多い作品(男子)



図6. 余白が多い作品(女子)

とが考えられる。また、集団での枠組みや社会の枠組みに対し収まらない、杉浦が指摘する、自己コントロールの力が弱く枠内に収めることができないことによるというものが考えられるだろう。図7(男子)はタバコのブランド名をはみ出して貼っており、アピールしてる、「ちょっとかっこつけてみたい。少しだけ反発してみたい。」ような雰囲気を感じる作品である。図8(女子)は、重ね貼り・はみ出し・逆さ貼り・横転貼りも全てある作品である。制作者も「なんかごちゃごちゃ」と感想を書いているが、そのとおりだと感じる。おそらくこの時点での心的エネルギーが高いのだろう。枠に収められずにはみ出してもある部分は2ヶ所あるが、左下にある白い模様は、はみ出したのを修正しようと、裏に折り込んでいる。今の環境からはみ出したいが、自分を合わせようとする気持ちもあるように感じる。また、エネルギーがあり過ぎてそのまま出してしまったという感もある作品である。

(6)逆さ貼り

逆さ貼りに関して、有意な性差は認められなかった。女子の割の生徒に逆さ貼りが見られた。女子の作品には、靴の切り抜きが多かったため、靴を逆さに貼っている作品が多く、デザイン面を考えている感じがする。例として図9を挙げる。また、男子の方は、少ないが、何かを表現しようとしているものも多く、例として挙げた図10は車が分裂し、その間から人間とバイクが落ちていく様子を表現している。



図 7. はみ出しがある作品(男子)



図 8. はみ出しがある作品(女子)

今村(2006)の研究による統合失調症の人の逆さ貼りは、認知的な歪みからくるものとしており、一般の高校生の作品にはみられなかった。高校生の場合、横転貼りをすることでその作品のデザイン性、何かを伝えようとする表現力の豊かさからくるものかを感じる。



図 9. 逆さ貼りのある作品(男子)



図 10. 逆さ貼りのある作品(女子)

(7)横転貼り

横転貼りは、有意な性差が認められ($\chi^2(1)=6.225, p<.05$), 横転貼りをしている生徒が女子の方に多かった。梶塚(1985)の高校生のロールシャッハテストの反応でも女子の方が感情を込めた言い回しをするので、男子よりも逸脱言語反応の%が高くなると指摘している。コラージュ制作でも、女子の方が何かを表現したい伝えたい気持ちが強く、感情面の方が思考より先立つので男子に比べ横転貼りが多くなるのではないかと考える。

図 11 は、人間の顔が横転している。横転することで作品全体が、茶目つ気たっぶりになる感じがする。図 12 は、左下の 4 枚の切片を横転させて貼っている。横にさせたことでパッと見て何だか認識ができない。右隣にあるチキンリトルに目が注がれる。このチキンリトルの困ったような驚き・不安を引き立たせたかったのか。その右上にも同じように横転した切片が、重ね貼りされている。横転されながらも、重ね貼り平坦に貼っている違いがおもしろいと感じた作品だった。

(8)台紙方向

台紙を横に使うか縦に使うかは、男女に有意な差がみられた($\chi^2(1)=22.249, p<.001$)。台紙を縦に使用した生徒は、男子の 7 割、横に使用した生徒は女子では 5 割以上の人にみられた。杉浦(1994)の研究では、高校生は四つ切りサイズを使用しているので、縦を使用した人は全体でみて非常に少なかった。本研究では、コラージュ制作を教室の机で行っており、八つ切りサイズの画用紙を使用しているので、縦でも横でも置きやすい。そのため縦を使用した生徒が多くなったと思われる。杉浦は(1994)は、「メッセージ性の強い縦を使う人は現実から距離をおきたいという欲求の表現と見ることもできる。」と指摘する。男子



図 11. 横転貼りがある作品(男子)



図 6. 横転貼りがある作品(女子)

に縦を使う人が多いということは、男子は上へ上へ行きたい気持ち、未来への指向性が高いのではないだろうか。それに対して、女子は上を見ると言うより自分の周辺を見る傾向にあり、土台をしっかりとしておきたい気持ちが強いのではないだろうか。そのため横を使用する人が多いのではないかと考えた。

(9)切り抜き方

切り抜き方の出現度数を示したもので、「四角形」($\chi^2(1)=8.441, p<.01$), 「円」($\chi^2(1)=6.855, p<.01$)「物の形」($\chi^2(1)=3.196, p<.10$), 「創作」($\chi^2(1)=15.531, p<.001$), 「その他」($\chi^2(1)=7.551, p<.01$), において、有意な差が認められた。「四角形」「その他」は男子に、「円」「物の形」「創作」は女子に出現度数が多い。気に入った絵や写真を切り抜く時、性差において、四角形、円、創作、その他で切る方法に有意な差がみられ、物の形にそって切る切り方に有意な傾向が認められた。女子の

方は、切り方が難しいと思われる物の形、円や創作(ハートの形など)が多い。男子は、直線で切るだけの四角形、またその他で雑誌 1 ページをそのまま貼るという方法をとる人が多い結果になった。これは、女子の方が手先が器用であることが非常に関係すると思われる。また、同じ材料でも切る型によって受ける印象がだいぶ違うことは大切だと感じる。杉浦(1994)が指摘するように、高校生は型にはまった切り方をするということから、物の形、四角などが多くなるのだろう。その典型例が作品 A13(男子)である。しかし、女子の方は、男子と違い型にはまったやり方よりも、自分なりにやりたい気持ちが強く、創作が多いのだと考えられる。その例は、作品 A14 である。ハートの型に切ったものを何枚か貼っている。グラデーションに重ねてあるポロシャツをハート型に切ったり、他の切り抜きも流線型に切っていて、暖かみ、優しさを感じる。作品の中に手先の器用さが感じられる。自分がやりたい作りたいイメージがそのまま形通りになるのも、手先が器用であるのは大きいと思われる。



図 13. 四角い切り方が多い作品(男子)



図 14. 様々な切り方が見られる作品(女子)

(10) 貼り方などの表現特徴

貼り方の出現度数において、「結合」($\chi^2(1)=11.284, p<.01$), 「文字」($\chi^2(1)=11.410, p<.01$) 「白黒」($\chi^2(1)=6.849, p<.01$) は、有意な性差がみられ、「表現」($\chi^2(1)=2.753, p<.10$) において、有意傾向が認められ、男子の方が出現度数が多かった。コラージュ制作の「選ぶ・切る・レイアウト・貼る」という行為は、心理的退行を促すとされている。実際、集団でやってもみな制作に夢中になり、没頭し、一言もしゃべらなくなる。特に、制作中に観察していると、男子の方が黙々と作品を作っている感じがした。「結合」が男子に多いのは、この心理的退行が男子の方が女子に比べ起きやすいのでは、ないだろうか。コラージュ制作は、「切る」というある意味暴力的な行為が行われながら、ちりばめられたものをまとめあげていく過程である。退行の中で、「選ぶ・切る・レイアウト・貼る」という過程の中で、イメージをそれ具体的なものに表現しようとする気持ちが強いのではないかと考える。中井(1993)は、「コラージュは、ハサミ1つを頼りにする冒険である。」としている。男子のこの冒険の中でのイメージを具体的な物にしたいのだろうか。

図15は、「結合」の例である。これを作った男子生徒は、制作後の感想は「テーマは素顔。自分ながらあっぱれという感じ。」と書いており、制作後満足感を得たようだ。作品は、何人かの顔を切り、それを結合させてまた、1人の別の顔をつくる。できあがったものが、自分の素顔とぴったりあうという感覚になり、ある意味モニタージュ的な感じがする。筆者の印象は、驚きと恐怖であった。左目の下に裸体の男の人を隠し、目は3つあり(左目の下に目がある)奇妙な感じを受ける作品である。素顔の自分は、不安なのだろうか。

「文字」も男子に多いという差が認められた。女子はイメージを絵や写真で表現することの方が好まれるが、男子は文字で表現できるかっこよさにひかれやすく、イメージを言語でストレートに表現することの方が好まれるのではないかと考える。

図16は男子が制作したものである。制作者のストレートな表現が言葉で表されていると感じる。コラージュ作品の上での文字表現は、見る側の視点からは大事な部分だと考える。加藤(2006)が指摘するように、コラージュの中の文字は生徒のメッセージの表れである。生徒のコラージュ作品上で文字表現という手段でコミュニケーションができるというのは、見る側からすればわかりやすい方法でもあるが、そこに目をとら



図15. 結合が見られる作品(男子)



図16. 文字を使用した作品(女子)

われ過ぎてもいけないと感じる。

「白黒」の切片を選んでいるのも男子の方が多かった。杉浦(1994)の研究によると、高校生群が一番「白黒」の写真を使う割合が多く、性差で見ると、中学生群と成人群では男性の方が女性より使用する率

が高いが、高校生群は性差に関係なく使用されているという結果になっている。杉浦の研究は、今からおよそ 15 年ほど前になり、その当時は社会的現象としてモノクロがしゃれた感覚として受け入れられていたが、今はモノクロより華やかな色が好まれている時代である。コラージュ上の色遣いには、時代の流行が反映される可能性がある。近年はおしゃれに敏感な女子生徒は、華やかな色合いを好むのではないだろうか。そして男子生徒は、白黒への憧れ、かっこよさ、もの静かな感じを受けており、好む生徒が多いのではないだろうかと考える。



図 17. 白黒の切り抜きを使用した作品(男子)

白黒だけのコラージュ作品を見ると、いろいろな色があるコラージュ作品より情報量が少なく、この作品が何を伝えようとしているのかと考えるこませる感じがする。

図 17 は男子生徒の作品である。全ての切り抜きが「白黒」である。暗さは感じられない。結合によって人の顔の形になっている。感想に「創造力が豊かになった。」と記している。白黒だけの切り抜きで制作すると、作る側の創造力を必要とすることもあるだろう。

2. コラージュ作品の内容分析

(1) 人間・動物の出現度数

人間・動物の切り抜きの出現度数では、「人間加工」($\chi^2(1)=8.241, p<.01$)で有意な性差がみられ、「非現実的人間部分」($\chi^2(1)=3.453, p<.10$)、「非現実的間合計」($\chi^2(1)=3.137, p<.10$)において、有意傾向が認められた。人間に関するものは、男子に出現度数が高く、動物に関するものは女子の方が出現度数が高い結果となった。男女ともに「人間の部分や全体」の切り抜きを使用している率は、7 割前後であり、男子の方が使用している率が多いが、有意な差ではない。また、「人間全体」の切り抜きを使用した率は、4 割前後となっている。杉浦(1994)の研究では、漫画やイラストの人間も含めているので 6 割を超えている。人間を使用する意味はさまざまあるに違いない。自分の憧れ、理想の自分、自分に近いものなどおそらく自分を投影しているものだろう。

図 18 は、男子の作品であるが「静かな冬の楽しみって言う感じで作った。スッキリ！」と感想を書いている。自分の楽しみでもあり、そこに自分に近いもの、または理想の自分がいるのだろう。静かな冬だが、躍動感があり、元気な作品だと感じる。図 19 は女子が制作したものである。人間の切り抜きがちりばめられ圧倒するが、左側に日本人の女性は 1 人だけ貼ってある。これが本人であり、制作者の理想は中心にいる外国人ではないだろうかと思われる。右上には、将来の理想の家族の写真だろうと思われる切り抜きが貼ってある。理想を表現した作品ではないだろうか。コラージュ作品中の人間の顔の表情や態度、姿には、自分の思考や感情を投影していたり、自分の周りいる人物の姿を表現したりしていることが多いだろう。コラージュを見る人間の解釈力が必要になることもあるし、制作者への質問ですぐに明らかになることもある。いずれにせよ人間の切り抜きは、生徒の様子を知る上で大切なポイントになるのではないかと。

また、「非現実的人間部分」や「非現実的人間合計」を使用している率が、若干、男子の方が多いことが認められた。使用していた生徒は、男子で 11 名であった。

図 20 は男子が制作したもので、右上にいる鳥のような動物の手が悪魔の手になっている。制作後の気持ちは、「二大カメラ復活がテーマ。とても楽しくやらせてもらった」と書いている。「非現実的人間」という



図 18. 人間の切り抜きを使用した作品(男子)



図 19. 人間の切り抜きを使用した作品(女子)

のが、天使や悪魔、幽霊などのもので、女子にとっては怖いもの、恐ろしいものという感情があり、それを使ってまで表現しようとは思わないのではないだろうか。唯一、女子で「非現実的人間」の切り抜きを使用していたのは、天使だけである。図 21 は、女子が制作したものであるが、左下に天使が貼ってある。

「人間加工(イラストや漫画)」に有意な差が認められ、男子の方が使用している人数が多かった。「人間加工」は、図 22 のように、ユーモラスな感じの切り抜きが多い。男子は、イメージを表現する時に、そのまま伝えるのではなく、ユーモラスな感覚を交えながら表現する方が好まれるのかもしれない。また、アピール度も高くなるように思う。

使用する率は男子が多いが、使用する枚数になると差は認められなくなる。つまり、女子は使用する生徒はあまりいないが、使用する生徒は 1 枚だけでなく、数枚使う傾向にあると考えられる。図 23 は、女子が制作したものであるが、人間のイラストが 4 枚使用されている。やはりこれもユーモラスさを表現したいのだろうか。全く写真の人間を使用していないのが不思議に感じる。

「非現実的動物全部」と「非現実的動物合計」は、女子の方が使用していた生徒多かった。女子が「非現実的動物」として貼り付けていたのは、ミッキー・ミニーマウス、リロアンドスティッチ、リトルチキンなどほとんどディズニーキャラクターだった。

図 24 は、女子が制作したものである。ディズニーキャラクターが数枚貼られている。「楽しかった。こういう発想をするのは苦手だよー」と感想を書いている。「楽しい」と「苦手」という感想が同居するところに、コラージュ制作の特徴がよく表れていると考えられる。図 25 も同じようにディズニーキャラクターがたくさん



図 20. 人間の切り抜きを使用した作品(男子)



図 21. 人間の切り抜きを使用した作品(女子)



図 22. 人間加工の切り抜きを使用した作品(男子)



図 23. 人間加工の切り抜きを使用した作品(女子)

貼ってある。図 25 を制作した女子は、「自分の好きな物がたくさん貼れて楽しかった」と書いてある。作品を見ても、満足感を感じることができる。このようなディズニーキャラクターを貼ってあるコラージュ作品を見ていくと、人間の切り抜きが少ないことに気がつく。ファンタジーの世界でその世界の主人公である「非現実的動物」と「人間」を貼るのは、違和感、心が落ち着かないのだろうか。今村(2006)によると、「非現実的動物」の多くがユーモラスな漫画的表現のキャラクターでもあること、そのキャラクターを用いることで、作品に遊びの要素が加わるとしている。外国人の女優や日本の芸能人・モデルに憧れる女子と同じように、ディズニーキャラクターに、憧れを感じる女子も多いのだろう。いろいろな性格のキャラクターがいることも彼女たちの魅力の 1 つであるのかもしれない。



図 24. 非現実的動物の切り抜きを使用した作品(男子)



図 25. 非現実的動物の切り抜きを使用した作品(女子)

(2) その他の切り抜きの出現度数

人間・動物以外の切り抜きの出現度数の性差については、「自然風景」($\chi^2(1)=9.741, p<.01$)、「植物」($\chi^2(1)=18.21, p<.001$)、「乗り物」($\chi^2(1)=25.118, p<.001$)、「装飾品」($\chi^2(1)=103.491, p<.001$)、「戦い」($\chi^2(1)=16.101, p<.001$)、「模様」($\chi^2(1)=7.15, p<.01$)、「マーク」($\chi^2(1)=4.097, p<.05$)、「スポーツ」($\chi^2(1)=6.735, p<.01$)、「化粧品」($\chi^2(1)=41.629, p<.001$)において、有意な差がみられ、「子ども」($\chi^2(1)=3.042, p<.10$)において、有意傾向が認められた。「自然風景」「乗り物」「戦い」「マーク」「スポーツ」は、男子に出現度数が高く、「植物」「装飾品」「模様」「化粧品」「子ども」は女子の方が出現度数が高い結果となった。

a. 「自然風景」

男子の方が女子よりも出現度数が高い。杉浦(1994)の研究では、有意な性差は認められていない。しかし、吉田(2001)の研究によると女子短大生では、風景に関しては、使用数が少ないと報告している。また、杉浦(1992)



図 26. 自然風景の切り抜きを使用した作品(男子)

では、内的葛藤や問題を直接見せないための材料で、防衛機制として使用される可能性が高いことを述べている。男子の方が、コラージュを作るのに防衛がはたらきやすいのだろうか。しかし、自然風景を貼ることでホットする感じがする。佐野(2003)によると、成人の場合コラージュ作品において、自然風景に関する切り抜きを多く用いる被験者は、ストレスに対して積極的・責任ある対応を取らない傾向があり、自然風景に関する切り抜きを少なく用いる被験者は、ストレスに対して積極的・責任ある対応をとる傾向があると指摘する。自然風景をたくさん貼る人は、貼るだけでホットする感覚になってしまい、ストレス対処法を行動としてはやらないことを好む人が多いのだろうか。

図 26 は男子の制作したものである。山や高原や湿地帯などの風景を重ね貼り無しで貼っている。左側に川が流れているが、あまり水量が多くない。川の流れは心的エネルギーを表すといわれている。この制作者の心的エネルギーはあまり高くないと感じる。そのため、これだけたくさんの自然風景を貼るのかと考える。筆者自身、自然風景を貼る時は、今の状況から逃避をしたいときに貼ることが多いような気がする。杉浦(1992)の述べる、内的葛藤や問題を直接みせないための材料に近い感じがする。

b.「乗り物」

男子の方が出現度数が高い。乗り物の切り抜きは、川の流れと同様心的エネルギーを表すといわれている。今村(2006)は、統合失調者と一般成人との比較から、制作者の行動性や外界への関心を表すのではないだろうかと考察している。男子は、狩猟を主に生活していたので、外界へ関心を向けるということをずっと続けてきている。だから、男子は外へ目を向けることが備わっているの



図 27. 乗り物の切り抜きを使用した作品(男子)

で、男子に乗り物の切り抜きを貼るのが多いだろうと考える。

図 27 は、男子が制作したものである。作品 B10 は、男子が制作したものである。このように乗り物が貼られるとき、その方向性が解釈されることが多い。特に車は高校生の興味対象になりやすく、コラージュに多く見られるが、雑誌広告などに収められている車の写真は、実は大半が左向きの物である。これはデザイン上そうになっているようで、こういった素材を使った場合の方向性の解釈は、慎重におこないたいと筆者は考える。

c.「植物」

女女子の方が、男子の 3 倍以上、植物の切り抜きを使用していた。加藤(2006)の研究においても同様な結果を示されている。杉浦(1994)の研究では、植物の出現数は、高校生の男女間に有意な差は認められなかったが、発達に伴い増加し、女性の方が男性よりも多くなる傾向が示されている。本研究では、女子に多いのは図 28 のように、花を画用紙一面に花の切り抜きをちりばめたものである。男子にはこういった作品はなかった。また、木の切り抜きを使用した作品が図 29 である。桜の木が横転貼りをしている。右上にクリスマスツリー、その下にドライフラワーが貼ってある。制作者の終了後の感想は「ごちゃごちゃしてしまった」と書いている。貼りたいものがたくさんあり、エネルギーの高さを感じさせる作品である。杉浦は、木には生命、成長、中心、保護を表しているとしている。桜の木が横転貼りしており、木が横に成長していくのは、どういう意味があるのだろうか。



図 28. 植物の切り抜きを使用した作品(男子)



図 29. 植物の切り抜きを使用した作品(女子)

(3)切り抜きの出現種類数

切り抜きが何種類使われたかは、男女に有意な差がみられ($t(373)=2.18, p<.05$), 女子の方が切り抜きの種類が多いという結果になった。女子の方が、切片数も多いので種類も豊かになるかもしれない。しかし、そればかりでなく、女子の方が、数多くの種類の写真や絵を使って、表現することを好み、男子の方が、同じ種類のを何枚か使用するということだと考える。

終わりに

本研究において、高校生 377 名のコラージュ作品と出会い、その一枚一枚に、描画では技術や表現力がなければそこまで表すことのできないと思われる表現を見いだした。すでに印刷された写真や絵を使い、それを組み合わせることにより、自分の内的なイメージをつくりあげていこうとする表現力の豊かさには心の底から驚かされた。たった 40 分という短い時間の中で、制作に没頭する姿、これは杉浦(1994)が示す、コラージュ治療の要因の 1 つである心理的退行が起きている状態だっただろう。この過程にはどういう意味があるのであろうか。佐藤(2003)は、「コラージュの制作過程は、思春期的人格形成に非常に類似している。」と述べている。また、竹内(2004)も、この制作過程が「思春期青年期の新たな自己像の作り直しというプロセスと共通するものがあり、意味が大きい。」と示している。印刷された写真や絵を使い、自分の気に入ったものだけを選んでいき、台紙の上にそれを再構成していく。趣味や興味、関心を対象化したもの、過去や未来へ目をむけるものや、自分の自己の内面や思考、自分が今まで知らなかった世界をどんどん作り上げていくことができる。印刷された写真や絵をこれまでなじんできた自分自身とし、それは、「作り上げられた自己」と考えられる。「使いたいものだけ選ぶ」という作業は、これまで統合していた自分をいったん打ち砕き、ばらばらにし、関係を断ち、タブー視された禁止を破り、必要なエッセンスを抜き出すに値すると佐藤(2003)は示す。思春期青年期ほど、数年の間に、多種・多次元の成長課題に立ち向かわなければならず、その課題を自分自身で処理・解決をしなければならない時期は他にはないだろう。その成長していく過程を、「選んで切る」という破壊のプロセスと「レイアウトして貼る」という再構築のプロセスを繰り返しながら、作品を制作することで表現している。この表現方法は、思春期青年期にとって大きな意味のある作業だと考える。

今回、言語にこだわらず高校生の表現を少しでも多く引き出し、彼ら、彼女らの心理を知る方法の一つとしてコラージュを取り上げたが、本研究を終えるに当たって、大事なものは「どんな方法を使うか」ではなく、「どのように彼ら、彼女らに興味を持つか」ではないかと考えている。コラージュ制作を丁寧に依頼したこと

は「私たちはあなたのことを知りたい」という真摯なメッセージであり、それに応えてくれたのだと感じた。心を表現しない子どもに問題があるのではなく、心を知ろうとしない大人たちに問題があるのではないか。377枚の豊かな表現を目の前にして、そう痛切に感じている。

引用文献

- 有元秀文. 2004. 「気持ち伝えられる子をそだてるには—子どもの意識調査から」『児童心理』7月号, 16-21.
- 青木智子. 2000. 「コラージュ技法・療法の現状と課題」『カウンセリング研究』33(3), 89-99.
- Bühler, C. 原田茂(訳). 1969. 『青年の精神生活』(協同出版).
- 日高なぎさ. 2001. 「学校現場における描画テストの応用について—3事例を通しての有効性の検討—」『臨床描画研究』XV.
- 一谷彊・横山基弘. 1979. 「樹木画の全体印象と高校生の不適応行動との関係—バウムテストを中心に—」『京都教育大学紀要』55, 1-22.
- 今村友木子. 2001. 「分裂病患者のコラージュ表現」『日本芸術療法学会誌』32(2), 14-25.
- 今村友木子. 2006. 『コラージュ表現—統合失調症者の特徴を探る—』(創元社).
- 梶塚隆光・菅原 憲. 1985. 「高校生のロールシャッハ反応について」『盛岡大学紀要』51, 15-27.
- 加藤大樹. 2003. 「高校生のコラージュ作品に関する研究—学級適応・性格の観点からの検討—」『日本芸術療法学会誌』34(2), 23-32.
- 加藤大樹. 2006. 「高校生の学級における個別コラージュ制作の試み—気分変化と作品特徴からの検討—」『学校カウンセリング研究』8, 17-24.
- 上別府圭子. 1999. 「臨床場面におけるコラージュの安全性の再検討」『現代のエスプリ』386, 164-174.
- 森谷寛之. 1988. 「心理療法におけるコラージュ(切り貼り遊び)の利用」『精神神経学雑誌』90, 450.
- 中井久夫. 1993. 「登校拒否児とその母親のケース—コメント/コラージュ私見」森谷寛之他編『コラージュ療法入門』.67-72. 137-146. (創元社).
- 佐野友泰. 2003. 「コラージュ作品の解釈仮説に関する基礎的研究Ⅱ—コラージュ作品の客観的指標とストレス対処行動の関連—」『日本芸術療法学会誌』34(2), 33-37.
- 佐藤仁美. 2003. 「思春期のコラージュ表現」『日本大学心理学研究』24, 8-15.
- 杉浦京子. 1992. 「自己啓発としての体験コラージュ」杉浦京子他編『体験コラージュ療法』.52-83. (山王出版).
- 杉浦京子. 1994. 『コラージュ療法』(川島書店).
- 竹内章乃. 2004. 「「新たな自己像の作り直し」につながるコラージュ」『月刊学校教育相談』9月号.
- 滝口正之・山根敏宏・岩岡真弘. 1999. 「コラージュ作品の発達的研究」『現代のエスプリ』386, .175-185.
- 寺嶋繁典. 2000. 「学校現場への描画の適応—教員を対象とした描画研修を例として—」『臨床描画研究』XV, .3-10.
- 吉田ゆり. 2001. 「人間関係体験学習におけるコラージュの導入—コラージュ作品に見える女子短大生の自己表現—」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』31, .167-189.